

あ　る　日

お　ち　ば

五八

模様作り

自作の箱や籠を手には十人餘りの女兒は保母と一緒に落葉ひろひに行く。はき清められた朝の道、ボカ／＼と陽あたりのよい屏をもれて晴れやかなカナリヤのさへずりが聞える。一同立止まつて耳を傾ける。

「雀？」と俊子さん。

「いゝえ」

「カナリヤでしょう、家のおとなりにもゐるのよ」
通り道だったので睦ちやんのお家へおかどから御病氣見舞をして行く、中央の通りには左側にふ

しん場がある、砂利を山のように積んで足場をかけ人夫が二人づゝでそれを高い所に運んでゐる、コンクリートの西洋館が建つところ。

「誰のお家？」「教會」

「お家の君ちやんやお母様と口曜に来るのよ、それで唱歌をうたつたりお話しいたりするの」

和ちやんは先生の代りに立派に説明をして下さる。

「あ、いてふの葉が」風もないのにハラ／＼と散つて来る。上をみると一週間前にこゝを通た時は見事についてゐた黄金の葉が上の方はまるで無く、ほうきのような枝が天へ向いて居り下枝にだけ少

しのこつてゐる、小さいのをよつて拾ふもの、美しいのをあつめるもの、たゞ澤山あつめるものとりぐ。

右側の學院の家根には臭氣ぬきの帽子のような風車がゆる／＼といくつもまわつてゐる。

「學校の屋上にも風車があるわね」と千代ちゃん、
「でもこれは形が違ふでしょ」

「屋上のは球みたい(の様)のが四つついてゐる」と光子さん。

この邊は邸宅や學校が多いのでお清めのすんだ朝の通りは静ではあるが落葉ひろひにはあまりむきでなかつた。歩を早めて次の通りに入る。櫻、青桐、樺、檜、榎、D邸の堀の外にはどんぐりも落ちてゐた。こゝで皆の箱や籠はいつぱいになつた。かへりには葉の澤山ついた大杏樹の下を通り籠にあふれるほどのおみやげをポケットにもいれスキップしながら校内についたのは豫定の四十分

を十分すぎてゐた。

お留守番のお友達にどんぐりやいてふをお裾分してから、一同は木の葉と、どんぐりの模様造りにかゝつた。落葉もお手々もよく洗つてから、濕布の上へ各自美しいと思つた葉をならべた。

「お客様ごつこのテーブル掛けにませう」落葉の模様にして」

圖案の上手なM子さんがお休みだったので仕方なく保母が大體の構圖をし、幼い人達のよい申出に従つて模様はだん／＼に變化して行つた、お隣のお室のK先生も來合せてよい助言を得、木の葉の位置は活きて來た。それからスミレクレオンで置いてある葉の色をみて寫生がはじまつた。お晝の時にはまだ出來かけだつたので模様作りの人達はお友達のお机に行つて食事をした。寫生にまだ興味をもたない人達は、園の庭から青桐の葉柄を拾て來てそれに通したりヒゴに通したりしてあそぶ。

子供も或人もその日をたのしみにまつてゐる。

(十一月二十七日)

B 室

昨日井頭へ行たおみやげだと云て文子さんから
 いただいた、おかめ、どんぐり、を割てナイフで線を
 掘てみた。それに繪具をつけて紙に押したら型が
 ついた。朝お室でしてゐたら皆がしたいと云て代
 りくりに型をつけた。

動物園ごつこの切符に落葉の型を押ししてみよう
 か、といふ事を成人が云ひ出した。小さい人達が
 皆賛成だつたので、筆とお皿とを用意して、繪具
 を溶いた。

「あゝ、チヨコレート色になつた。茶色に今、何
 の色いれたの？」

環視の可愛い、瞳はつぶらに光てゐる。

「なせ白いのをませるの？」

「僕にもやらせて」手の疲れた人と代り合て秀ち
 やん幸ちやんも葉の寫生をする。おかへりまでに
 ドングリの線だけがのこつたのでこれは明日にし
 た。布に寫生をした子達は、布の上にクレオンを
 置かないこと、お手々を洗つてからでないと折角
 の模様汚れること、お帳面へ畫くクレイオンで
 は布にはかけないこと、緑色が用意してなかつた
 爲、黄と青とで緑が出来る事などを經驗した。翌
 日になつたら水に入れて置かなかつた葉は大分ち
 ゃれたり色を失たりした。中には水をつけると美
 しくなるのもあつた。ドングリの色は昨日と變ら
 なかつた二日目の午前中に模様は出来上た。

水に浸してからアイロンをかけ、朝毎に早く登
 園した人達でまわりをかゞつて合作のテーブル掛
 が出来た。

「お正月になつたらこれをかけてお客様ごつこを
 ませうね」

「水でうすくすると葉の形がよく紙につかないから」

「楓は赤いから赤いのも作つてね」

「端の處が黄色くなつてゐてよ、それから黄色ばかりのもあつてよ」

幼い人達の言葉に従つて茶、黄、緑、紅、チョコレート色、黒の各種が溶けた。切符の紙には丁度はまる位な大きさの葉がもつとあるといふけど、といふのを聞いて壽郎さんが、

「僕知てゐる、拾つてあげよう」

「僕も」と茂ちやん

山吹やどうだん、にしき木の葉が学校のまわりからひろひあつめられた。葉に繪具をつけたのを紙にのせたら動かないようにする事、筆は氣をつけて置かないと方々へ轉て汚すこと、繪具が干かないうちに觸ると、形がぐづれる事などを經驗しながら種々な木の葉の形が押し出された。日向に

ならべて、かはかす者、作る者、代り代りにして百枚餘りの葉型はわずかの間に出來上る。

「先生いつ動物園ごっこするの？」

「誠さん達の作つてゐる象のお家が出來たらね」
「さうほ、もうぢきね」動物園ごっこはこうして組中のだれもの、めあてになつて行きます。

「先生、またこんなきれいなのが」まさ子さんは櫻の落葉を兩手にして來ました。「ちやそれで入口の飾りを作りませう、細いはりがねで貫して葉綴りが出來ます。

C 室

四歳の雪子さん、一さんも一處に持ちきれないほどたくさんの青桐の落葉を拾ひました。

軟かい葉もあります、がさ／＼音のするものもあります。葉をむしつてごちさうが出來ました。棒(葉柄)の中には、なか／＼折れないのと、一寸

力を入れるとポキツとすぐ折れるのとあります。小さい手に丁度握り良いお箸が、たくさん出来ます、墨をしいた上にお座りして落ち葉のごちさうごつこがはじまりました。先生がお母さん、私お姉さん」元氣な京子さんはいそがしさうです。そこへ敏郎さんや健ちゃんがまた一抱へづゝ落葉を捨て来ました。「向にもおはなれを作りませう」先生は、うすべりを二枚持てきてまたお家を作って下さいました。晴れやかな光線が、秋の色豊かな室内に子供と踊つてゐます。

A 室

勇太郎さん、宏さん達はお掃除の出来た校庭で元氣にかけっこをしてゐましたが、先生が櫻の木の下で何か他の友達とさがしていらつしやるので行ってみました。きれいな紅や黄色の葉がおちてゐるのです。「僕もつ」さうして探してゐるうちに緑

色のも、茶色のもありました。皆が拾へた時、これを寫生しようといふ事になりました。日常本校のお兄さんやお姉さん達の寫生を見慣れてゐる幼児には寫生は大變たのしみでした。お室の机にならべて一心にかきはじめました。虫喰のやぶれ、黒い班點、暗緑の班點、つやのいゝ茶色、くすんだ茶色、密腺、成人は無言でも幼い人の目はよくありのまゝをうつして行きます。一枚出来た敏彦さんは「僕、もつと他の葉を拾つて来る」と庭に行きます。るりの大空に、細い落葉に輝かしい秋の色は子供のまはりにみちてゐます。

しばらくしてC室では幼い人達が木になつたり葉になつたりして室中を踊つてゐました。

(十一月三十日)